

赤れんがNews

地域に愛され
信頼される病院へ鳥取県立中央病院 院長 Chikumi Hiroki 千 酌 浩 樹

新院長就任特別インタビュー



Q.これまでのご経歴や専門分野を簡単に教えてくださいませんか？

A.鳥取大学を卒業後、鳥取大学附属病院の呼吸器内科に入局しました。そこで感染症と出会い、肺炎や結核などの診療を専門的に始めました。それからアメリカの国立衛生研究所に留学し、経験を積んで帰ってきたところ、新しく感染症内科という独立の部門をやらないかと声をかけていただきました。その後、新型コロナウイルス感染症対応などにも取り組み、このたび、ご縁をいただき、鳥取県立中央病院の院長に就任いたしました。

Q.病院の方向性についてはどのようにお考えですか。

A.「地域で信頼される高度急性期を担う病院」という方向性が柱です。それに加えて、県立病院として担うべき新生児医療や周産期医療などは当院の使命ですから、積極的に取り組みたいと思っています。また、ダヴィンチなどの先進機器も導入していますので、これらをしっかり活用し、高度な医療を提供し続けます。開業医の先生方、そして地域の皆さんから、あらゆる面で信頼され、それに応えることが最も重要だと考えています。

Q.地域の方々に「信頼される病院」となるために必要なことは？

A.「私たちはそういう病院になれる」という誇りと意識を全職員が持つことが重要だと思います。職員一人ひとりが、どういう病院になるべきかを考えたとき、日々の場面で最適な対応がおのずと出てくると思うんです。

Q.職員にどのような病院文化を根づかせたいですか？

A.使命を帯びた病院で働くからこそ、職員には「誇り」と「働きやすさ」を感じてほしいと思っています。そのためには、まずあいさつを自然と行える文化を根付かせたいですね。あらゆる職種がお互いを尊敬し合うことが大切です。あいさつは、患者サービスであると同時に、職員同士が気持ちよく働くための職員サービスなのだと思います。お互いを尊重し、自然とあいさつが出る、そういう風土を築きたいです。

Q.院長になって、まず取り組みたいことは何ですか？

A.医療にとって、地域との連携は非常に重要です。開業医さんとの連携はもちろんですが、東部医療圏内の「最後の砦」の病院として、地域の皆さんから信頼を受け続けられることが大事だと考えています。実は、私はこの鳥取県立中央病院で生まれたんです。今ある場所とは違いますが、この病院にはことのほか思い入れがあります。これまで職員の皆さんが築き上げてこられた素晴らしい病院をさらに磨き上げ、発展させることが私の務めだと考えています。今後は、広報活動なども含め様々なことに取り組んでいきたいと思っています。

Q.ご趣味や休日の過ごし方は？

A.趣味は、数年前から再開したテニスです。鳥取市はテニスが盛んでコートも充実していますから、もっと楽しみたいと思っています。

Q.好きな言葉を教えてください

A.「小さなことを大切に」という言葉です。全ては小さなことから始まるんです。これをANAのアテンダントの方が接遇研修で教えてくれて、本当だと思いました。朝の挨拶や声かけなど、小さなことを大切にすることが、結果的に大きな信頼へと繋がると考えています。

Q.職員・患者・地域の皆さんへのメッセージをお願いします。

A.私たち職員は、この素晴らしい病院で働いているという誇りを持っています。今まで先輩たちが築いてこられた、地域からの厚い信頼をしっかりと引き継ぎ、職員一丸となってますます発展させてまいります。

対象となる年齢の方に、HPV(ヒトパピローマウイルス)ワクチンを

ワクチンは、個人を守り、社会の疾病構造を変え、平均寿命の延伸に貢献してきました。天然痘の根絶はその良い例です。

HPVワクチンは、子宮頸がん等のがんの原因となるHPV感染を防ぐ「がん予防ワクチン」です。感染症と腫瘍領域をつなぐ人類の英知と言えます。

オーストラリアでは15歳女子のワクチン接種率が85%を超え、対象型の感染率が92%減少しました。2035年頃までの子宮頸がん排除が見えてきたようです。本邦では、同ワクチン普及により子宮頸がん新規患者数が年間約1万から20分の1程度(約500人規模)に減る試算があります。2023年から定期接種となった9価ワクチン(シルガード9)は、原因HPV型の80~90%に対応し、予防効果の飛躍的向上が期待されています。

HPVは多くの人が一生涯に一度は感染すると言われ、ワクチンで感染と発症を防ぐことができれば、これ以上望ましいことはありません。日本のHPVワクチン定期接種の対象は小学6年生から高校1年生相当の女子です。機会を最大限に活用し、将来の子宮頸がん罹患リスク低減のため、積極的なワクチン接種を強く推奨いたします。

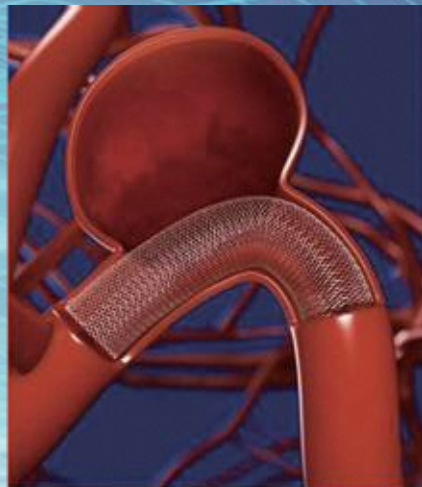
(感染症・総合内科 医長 椋田 権吾)

瘤内留置型のフローダイバーターシステムの使用ができるようになりました!

・フローダイバーターステント(FDS)とは?

脳動脈瘤の治療に用いられるメッシュ状の金属の筒です。動脈瘤の入り口(ネック)にカテーテルを通して留置することで、動脈瘤への血流を減らし、血液がうっ滞して血栓化することで破裂を防ぎます。メリットとして、開頭手術をせずに高い確率で脳動脈瘤の完治がめざせます。根治率は術後1年で86.8%、3年で93.4%、5年で95.2%と高く、経年的に治療が進むことが特徴です(赤れんがNews 9号に掲載)。

一方で、術前から血液をさらさらにする抗血小板薬を高用量使用し、術後も長期間継続する必要性があるため、出血のリスクはどうしても避けることができませんでした。



・瘤内留置型のフローダイバーターシステム

その問題を解消する、瘤内留置型のFDSの使用が当院でもできるようになりました。これにより、複雑な脳動脈瘤の治療手技をシンプルにし、治療が早期に終了できるようになっています。

俵状のステントを留置することで、動脈瘤内の血栓形成を促進し、術後の抗血小板療法をシンプルにし、早期に終了することが可能になりました。

従来のFDSと比較し、大型でない動脈瘤にも適応があるのは変わりませんが、急性期くも膜下出血の治療にも使用可能となっているのは大きな違いです。

適応となる症例は従来のFDSよりも限られますが、患者さんの負担をより減らして動脈瘤の破裂予防ができる有用なシステムであり、お気軽に当科へご相談下さい。

(脳神経外科 医長 長尾 裕一郎)

県立中央病院を支えるスタッフ vol.8

地域医療のつなぎ役

患者支援センター地域連携部門は看護師や医療ソーシャルワーカーなど多職種が集まったチームです。その中で事務員は、紹介予約の調整や入院支援に関わる電話対応・事務処理などを行っています。院内の他職種とも連携をとりながら、患者さんが安心して適切な医療を受けられるように、地域の医療機関や施設をスムーズにつなげるよう心がけて日々業務に携わっています。

(患者支援センター 副センター長 田中 幸世)



令和7年度 医療講座

Next

2025年11月22日 フレイル予防について

2026年 2月21日 肝胆脾疾患について

詳細は当院ホームページでご確認ください。

過去の講演の動画も公開しております。

※事情により動画配信しない場合もあります。ご了承ください。



日本海テレビのニュース番組「One LIFE&NEWS」内で、毎月1回 医療情報の解説を行っています。



2025年10月 放射線治療 切らずに治療(低侵襲治療)

放射線科 部長 中村一彦

2025年11月 泌尿器関係 腎臓を守るために

泌尿器科 部長 村岡邦康

2025年12月 感染症 インフル・コロナ感染対策

感染症・総合内科 医長 棕田権吾

2026年 1月 脳卒中 病態と予防

脳神経内科 医師 松本正太

2026年 2月 女性の健康ケア 子宮頸がん予防ワクチン

産婦人科 部長 工藤明子

2026年 3月 人工関節 低侵襲アプローチ

整形外科 部長 上村篤史

過去月の番組はYouTubeにて公開中です。

Instagramで
情報発信中



院内のトピックスや行事予定などの、お知らせを随時発信しています。



TOTTORI_CHUOBYOUIN